

保育者養成教育に関する一考察 —理論的な卒業研究指導を中心として—

中村勝美・木村安宏・田村滋男・田中麻里・池田孝博
飯塚一裕・永田 誠・柏村雪子

(佐賀短期大学 幼児保育学科)

(平成20年 2 月29日受理)

A Study on the Nursery Teachers' Training: Supervising and doing educational research projects as a requirement for a junior college course

Katsumi NAKAMURA, Yasuhiro KIMURA, Shigeo TAMURA, Mari TANAKA, Takahiro IKEDA,
Kazuhiro IZUKA, Makoto NAGATA, Yukiko KASHIWAMURA

(*Department of Early Childhood Education and Care, Saga Junior College*)

(Accepted February 29, 2008)

Abstract

The second grade students, who belong to the Department of Early Childhood Education and Care at Saga Junior College, undertake some sort of educational research as a requirement for a two-year undergraduate course. This Research Projects consist of two types: dissertation and performance. To produce a dissertation, students need to select a topic, identify the objectives of the study, plan and design a suitable methodology, collect, analyse and present information. Recently the department educational staff finds it difficult to make the students organise their research projects because of the lack of such skills. This paper aims to look back on the short history of the Research Project at the department and clarify problems of supervising them.

Key words : Nursery Training 保育者養成
Research Project 卒業研究

1. 研究の目的

短期大学における保育者養成では、通常2年間に幼稚園教諭2種免許状、保育士資格という2つの資格を取得するため、実習を含めた教育課程が過密にならざるを得ない。本学幼児保育学科も同様であり、2年間で卒業単位の62単位を大きく上回る、平均90単位を取得し卒業している。

本学は短期大学でありながら、「真理を究め、技を練り」という創設者の言葉を実践すべく、長年にわたって全学生に「卒業研究」を課し、保育に関わる諸問題について探求する場を提供してきた。「卒業研究」においては通常の授業では得られない、専任教員による学生に対するきめ細かい個人指導や、ゼミ形式での学生相互の学習効果などが期待されてきた。しかしながら、池田ら(2008)が指摘するように、近年、入学者の多様化が進み、学生の基礎的学力や学習意欲に差が生じ、従来の卒業研究指導に困難が生じるようになった。

2年間という限られた期間で、学生および保育現場の双方から高い評価を得られるような保育者養成をいかに行っていかかということは、本学幼児保育学科の教職員全てに関わる大きな課題であることは言うまでもない。したがって、学生、教職員共に多大のエネルギーを費やす卒業研究のあり方については、そのときどきの学生の現状に応じて、最適の教育方法を常に試行錯誤していく必要性があろう。しかしながら、30年以上の歴史の重みゆえか、従前どおりのやり方が継承され、小さな改善は重ねられてきたものの、「卒業研究」指導のあり方が根本から問い直されることはほとんどなかった。

本格的な全入時代、大学淘汰の時代に直面し、幼児保育学科の教育理念を見つめなおし、よりよい学生教育の実現のためにカリキュラム改革を進めるには、卒業研究の改革は喫緊の課題であろう。本稿の目的は、理論系の卒業研究指導の今後のあり方を考えるため、過去のデータに基づきながら、現在の卒業研究のあり方、とりわけ指導体制や学生の希望選択の方法について問題提起することである。

2. 「卒業研究」とは

佐賀短期大学幼児保育学科における卒業研究(演習)(後述のように、現在は卒業研究から卒業演習へと科目名が変更されているが、本稿では以下、卒業研究と総称する)は、大きく「実技系」と「理論系」に分かれている。「実技系」は、ダンス劇、コーラス、器楽アンサンブル、ブラックシアター等を主な内容とし、研究の成果を毎年12月中旬に学外のホールで開催される「佐賀短期大学幼児保育学科発表会」で発表する。一方、「理論系」

の卒業研究は、保育や幼児教育に関する諸問題に、主として調査、文献研究、教材研究の手法を用いて取り組み、1月末に学内で開催される「卒業研究発表会」においてその成果を発表する。2001年からは、卒業研究の成果を広く公表するため、「実技」、「理論」の双方を含む卒業研究抄録が作成されるようになった。

実技発表会は2007年で第35回を迎えるが、1973年に学校行事として開始された。発表までの計画、練習等の過程が「卒業研究」(2年前・後期、演習2単位)として単位化され、卒業必修科目とされたのは、学生便覧によると1987年のことである。その後、2002年に「卒業演習」(2年後期、演習1単位)と名称、単位数が変更されたが、2年次の1年間を通じて研究指導を行い、現在に至っている。1965年の佐賀短期大学保育科開設から、1987年の「卒業研究」単位化までの20余年、理論系の卒業研究がどのように行われてきたのか、その実態は定かではない。当時の関係者の記憶によれば、授業として単位化はされていなかったものの、時間割には記載され、「実技系発表会」に出演した学生、指導した教員を含め、学科総動員で学生指導や研究発表が行われていたそうである。

3. 方 法

第一に、卒業研究抄録が作成される以前の卒業研究の実態を示す資料がどの程度保存されているか、予備的な調査を行った。その結果、1991年から1995年までの期間において、卒業研究発表会のプログラムなど、担当教員名や研究テーマ、学生の氏名が明記された資料が比較的良好に保存されていることが分かった。しかしながら、一部の現職教員によって指導された研究を除き、卒業研究のレポート自体は散逸しており、図書館にも保存されていないことが明らかになった。

したがって、1991年から1995年までの5年間(以後、Ⅰ期とする)と、2001年から2006年までの6年間(以後、Ⅱ期とする)について、履修者数の動向(学生数、理論系・実技系の割合)や指導体制(指導担当者数、教員一人当たりの指導学生数・テーマ数、共同研究の人数)、テーマの傾向(テーマの分類、担当教員の専門性との適合性)を比較検討することとした。保存されている資料の制約上、卒業研究テーマや内容について、質的な分析は困難であり、数量的な比較にとどまらざるを得なかった。

第二に、前述の調査の結果明らかになった、学生の卒業研究の選択(理論系・実技系)や卒業研究テーマの選択に影響している要因について、さらに詳しく分析するため、以下の方法により現役の学生に対する調査を行った。

- ① 対象：佐賀短期大学幼児保育学科2年生 108名
- ② 調査の方法：前期試験終了時、質問紙を一斉配布し、

自己記入を求めた。10分程度の記入時間を与え回収を行った。

③ 調査日：2007年8月3日

④ 調査内容：質問内容は以下の通りである。

- ・卒業研究の希望調査の際に重視したこと
- ・現在所属している卒業研究の希望順位
- ・現在の卒業研究への取組み・意欲
- ・研究テーマの決定主体（理論系学生のみ）

4. 結果と考察

① 卒業研究の概要

<学生数>

図1は卒業研究の履修者数をそれぞれ「実技系」と「理論系」とに分けて示したものである。

I期においては、実技系、理論系の選択者はそれぞれ平均して、62.2人、53.2人である。II期においては、同様にそれぞれ83.1人、30.8人である。

<指導担当教員数>

卒業研究の指導を担当した専任教員数は、表1の通り

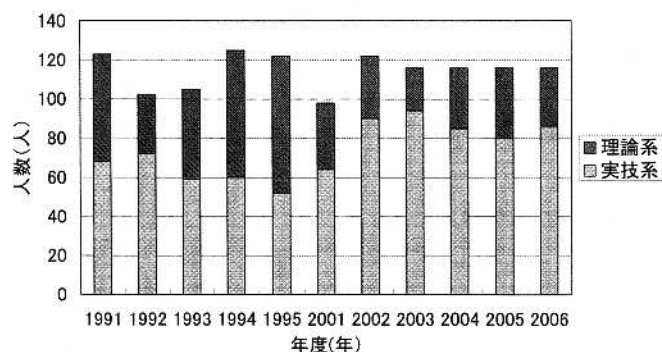


図1 「卒業研究」における理論系選択者の推移

表1 卒業研究教員数の内訳（単位：人）

	理論系	実技系
< I期 >		
1991年	5	5
1992	6	4
1993	6	4
1994	6	4
1995	8	3
< II期 >		
2001年	6	5
2002	5	6
2003	4 ¹	6
2004	5	6
2005	7 ²	6
2006	7	5

1 教員の延べ数は5名であるが、前期と後期で指導担当者が交代しているため、実質的には4名で担当した。

2 7名中1名は、実技、理論の両方の学生を指導した。

である。

<理論系と実技系の選択者数の割合>

図2および図3は、理論系と実技系の選択者数の割合を示すグラフである。

<実施体制>

表2は、「理論系」の教員一人当たりが担当した学生数と指導した研究テーマの数の平均、および1テーマ毎の学生数を示すものである。

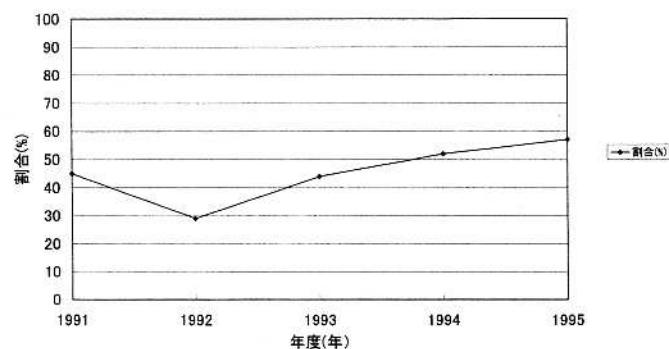


図2 「卒業研究」履修者全体に占める理論系選択者の割合（I期）

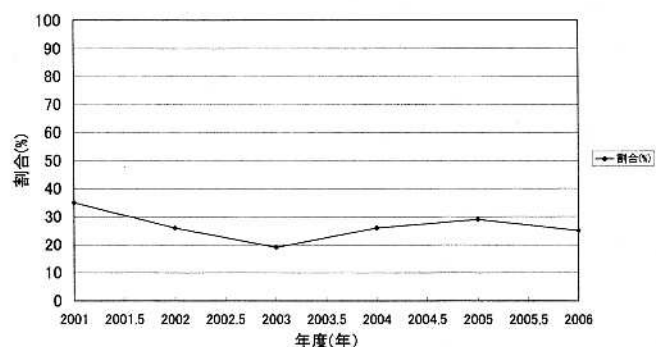


図3 「卒業研究」履修者全体に占める理論系選択者の割合（II期）

表2 「理論系」の卒業研究の実施体制

年度	教員1人当たりの担当学生数(平均)	教員1人当たりのテーマ数(平均)	1テーマ当たりの学生数(平均)
1991	11.0	4.2	2.6
1992	5.0	2.0	2.5
1993	7.7	3.3	2.3
1994	10.8	4.3	2.5
1995	8.8	3.5	2.5
2001	5.7	3.5	1.6
2002	6.4	5.4	1.2
2003	5.5	4.5	1.2
2004	6.2	3.0	2.1
2005	5.1	2.0	2.6
2006	4.3	1.4	3.0

<考察>

「卒業研究」の全履修者数は年度によって、多少の変動はあるものの、全期間を通じた平均は116名であり、ほぼ一定している。「理論系」の選択者は、Ⅰ期には平均53.2人(46.1%)であったが、Ⅱ期には平均30.8人(26.5%)に減少している。「理論系」選択者の減少すなわち「実技系」選択者の割合の増加は、表1から明らかなように、実技系の指導教員の増員を契機として、具体的には2002年に「実技系」卒業研究の演目として新たにブラックシアターが加わったことから生じたと思われる。

Ⅰ期においては、「実技系」の卒業研究を選択できる学生の上限がおそらく60人前後に設定され、それを上回る学生を「理論系」が吸収していたものと推定される。そのため、実技系の学生数は学生数全体の増減の影響をそれほど受けていない。例外的に、1995年度は「理論系」選択学生の割合が57%ともっとも高くなっている。この年度は「理論系」指導教員が8名に対し、「実技系」指導教員が3名だったことが、学生数の比率に影響していると思われる。

Ⅱ期においては、前述のように実技系の演目が増加した2002年度以降、「理論系」選択者が30%を上回ることではなく、2006年度には25.0%、図3にはないが2007年には22.6%と減少傾向が続いている。2006年より、「理論系」の指導担当者は1名増加した一方、実技発表会の演

目から「腹話術」がなくなった。しかしながら、「腹話術」を選択する学生数はもともと少なかったため、全体に大きな影響を与えることはなかった。

「理論系」選択者数の減少に伴い、教員1人当たりの担当学生数は、Ⅰ期と比べてⅡ期の方が少なくなっている。また、教員1人当たりが指導したテーマ数も減少傾向にあり、個人研究よりも共同研究の形態を取るケースが増加している。

② 「理論系」卒業研究のテーマ(内容)

<テーマの分類>

研究テーマについては、現在幼児保育学科で展開されている授業科目名をキーワードとして、その内容を分類することを試みた。卒業研究レポートを実際に指導した教員が現在も在職する場合は、主としてその担当者が分類を行い、すでに離職している場合については、現職の教員7名で研究題目よりキーワードを推測し、協議の上決定した。表3は、Ⅰ・Ⅱ期それぞれの卒業研究の内容を分類したものである。幼児保育学科で展開される授業科目名に当てはまらないものは、「その他」に分類した。

<研究の内容と指導担当者の専門性との適合性>

学生の卒業研究の内容と、指導を担当した教員の専門分野がどの程度関連しているのか明らかにするため、「キーワード」と指導教員の担当する授業科目が一致する場合は適合、一致しない場合は不適合として分類した。

表3 「理論系」卒業研究のテーマ(内容)

系列	キーワード	Ⅰ期	Ⅱ期	系列	キーワード	Ⅰ期	Ⅱ期
・ 保育の本質	保育原理	8	1	保育の内容・方法	障害児保育	13	16
	児童福祉	6	5		幼児生活文化	9	4
	社会福祉	5	5		人間関係	2	2
	社会福祉援助技術	1	1		保育カウンセリング	1	0
	養護原理	1	0		こどもと遊び	1	3
	小 計	21	12		造形表現	1	5
保育の対象	発達心理学	12	3		保育内容総論	1	1
	教育臨床心理学	8	3		養護内容	1	1
	精神保健	2	3		言葉	1	1
	小児栄養	2	5		保育指導論	1	0
	家族援助論	1	4		幼児ダンス	0	1
	家族援助技術	1	1		音楽療法	0	2
	小児保健	0	3		音楽表現	0	1
	小 計	26	22		環境	0	6
技能基礎	幼児体育	1	6		健康	0	7
	小 計	1	6		乳児保育	0	2
その他	レクリエーション概論	16	0		表現	0	3
	ボランティア入門	1	1		発達障害療育法	0	4
	その他	11	5		小 計	31	59
	小 計	28	6				

2期欄の()内は、各系列内での順位を示す。

表4 指導教員の専門性と卒業研究テーマの適合率

適合率 (%)	人数 (人)
100	2
～80	4
～60	2
～40	1
～20	2
～0	0

I・II期とも、各年度の適合度にはかなりのばらつきが見られたが、I・II期の時期による大きな傾向の違いは見られなかった。一方、指導教員間には適合度に大きなばらつきが見られた。指導した卒業研究テーマの総数が5以下の教員を除いた、11名の専門性と研究テーマとの適合率を表4に示した。

<考察>

卒業研究の内容をキーワードにより分類したところ、I期では24種類、II期では29種類（その他は除く）にわたっていた。テーマ数はI・II期ともほぼ同数であったため、II期の方が若干、テーマが多様化したといえる。全体的な傾向として、「保育の本質・目的」に関するテーマが減少し、「保育の内容・方法」の分野が増加している。最近の学生は、理論的な研究であってもより実践的なテーマを選択する傾向があることがうかがえる。

I期に多数を占めた「レクリエーション概論」はII期にはゼロであり、代わりに健康、幼児体育、小児保健の項目が増加している。これは、I期とII期で体育分野の指導教員が異なることが影響していると推察される。

また、II期においては、家族援助や乳児保育、食育、環境教育、発達障害療育法など新しい保育のニーズを反映した研究テーマが多く見られる。保育士養成カリキュラムの変更が与えた影響ももちろんあろうが、学生あるいは指導教員がより現代的な課題に取り組もうとする姿勢を反映するものと考えられる。

指導教員の専門性とテーマの適合性については、個々の教員により大きな差が見られた。卒業研究の内容が全て自分の専門分野と一致する教員もいれば、必ずしも自分の専門分野ではない領域の研究指導を半数以上行っている教員もいる。研究テーマの決定が、学生の興味関心によるものなのか、あるいは教員の指導方針によるものなのか、この結果からは判別不能であるため、なぜこのような差がでるのかは定かではない。

③ 現在の学生に対する調査

前項で見てきたように、1990年代から比較して、現在、理論系の卒業研究を選択する学生数は明らかに減少していることが分かった。その要因として、実技発表会の演目の増加によって出演できる学生数が増えたことが指摘できる。それでは、こうした理論系の卒業研究の選択

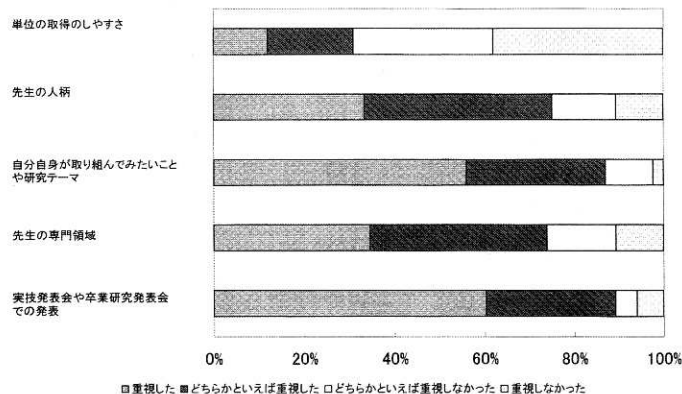


図4 卒業研究の選択において重視したことがら（実技系）

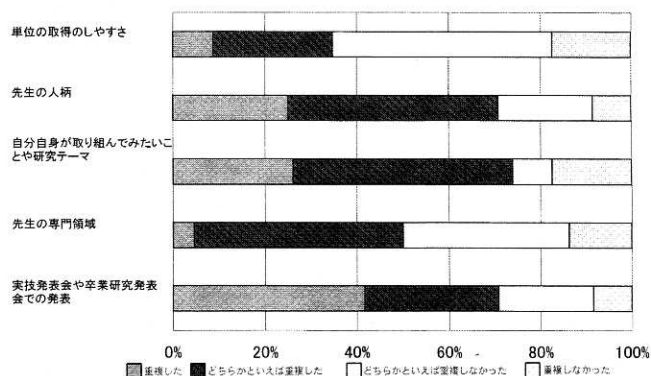


図5 卒業研究の選択において重視したことがら（理論系）

者の減少と池田ら（2008）が指摘するようなかれらの学習意欲や学習スキルの低下はどのような関わりがあるのだろうか。

<卒業研究の選択で重視したことがら>

卒業研究の希望調査の際、重視したことがらについて調査し、「理論系」の学生と「実技系」の学生についてそれぞれ図4、図5に示した。「実技系」の選択者は、「実技発表会」を見て「自分自身が取り組みたいこと」を見出し、それを指導する教師の専門領域を意識し、選択を行っている。これに対し、理論系の選択者は「自分自身が取り組みたいこと」を重視したと回答する学生は、実技系の半数にも満たない。

<所属する卒業研究の希望順位>

「あなたが現在所属する卒業研究の希望順位はどれに当てはまるか」という質問への回答は、図6に示したように「理論系」と「実技系」で対照的な結果となった。「実技系」では実に88%が第1希望と答えたのに対し、「理論系」では約3分の1の29%である。また「理論系」では54%が第1希望から第3希望以外、すなわちまったく希望していなかった所属に割り当てられている。一方実技系では、98%が第2希望以内に所属している。

<卒業研究への取り組み>

卒業研究への取組みに対する学生の自己評価については、図7に示したように、「実技系」では48%が「積極的・意欲的に取り組んでいる」と回答しているが、「理論系」では21%にとどまっている。「実技系」では「どちらかといえば積極的・意欲的に取り組んでいる」も含めると97%になる。一方、「理論系」では「どちらかといえばやる気がない、何をしてもいいかわからない」「やる気がない、何をしてもいいかわからない」と回答した学生が合計して、37%存在する。

<研究テーマの選択>

「理論系」学生のうち、75%が自分でテーマを決めており、21%は指導教員がテーマを決めたと回答している。

<考察>

以上の結果から、「理論系」学生は「実技系」学生と比較して、1年次末に行われる希望調査の段階で、自分自身のやりたいことが明確に定まっていなかった傾向があることが分かった。また「理論系」学生のうち、第1希望の指導教員の所属に割り当てられた学生は3分の1であり、半数は当初はまったく希望していなかった所属に振り分けられている。これらの事柄が、卒業研究に対する意欲の低下につながっているといえよう。

今回の調査では、「理論系」学生のうちどの程度が「実技系」を希望したのにも関わらず、外れたのかは明らかにされていないが、自分のやりたいことやテーマを見出し、それが実現されることが学習意欲の向上につながることが明らかになった。

5. むすびにかえて

卒業研究に関する過去のデータを整理することによって、次のことが明らかになった。まず、ここ数年、「理論系」の卒業研究を希望する学生は減少している。これには「実技系」卒業研究の指導体制や演目の種類・数が大きく影響している。

「理論系」の卒業研究のテーマについては、実践的内容の増加・多様化が見られ、教員は必ずしも専門領域でないものも含めて指導にあたっている。

また、現在の学生へのアンケートから、「理論系」学生の半数以上が希望していない所属に割り当てられたことが分かった。これが、「理論系」学生の学習意欲の低さの一因と考えられる。

今回の調査研究の過程で、「理論系」卒業研究の存在意義について、疑問を感じるものが幾度となくあった。卒業研究とは、誰のために、どのような目的で行われているのか。個別の課題の探求か、二年間の学修の集大成なのか、学科教員のあいだで確固たる共通認識や客観的評価の基準は存在しない。また、「実技系」と「理論系」とは、研究内容や発表のスタイル、指導方法にいたるま

で、まったく異質のものであるにも関わらず、「卒業研究」という一つの枠にはめ込み、指導教員に学生を振り分けていることに問題点があるようにも感じられた。

開始当初の教育理念や熱意を知る教員も少なくなり、形骸化しつつある卒業研究を再び活性化させるために、最後にいくつか提案をしたい。

まず、「理論系」に多数存在する、学習意欲の低い学生に対しては、取り組みたいテーマを自ら見出すことができるよう援助する必要があるだろう。オリエンテーションで一斉に学生を振り分けるのではなく、迷っている学生には個別に面談を行うなどの支援が必要ではないだろうか。

また、「卒業研究」の質・水準の向上のためには、副査による評価とは言わないまでも、研究抄録以外に、教務課に卒業研究レポートの提出を義務付けるなどの措置が必要と思われる。また、学生による授業評価等の活用も早急に検討しなければならない。

学生が希望するテーマを自由に選択することは、理想ではあるが、それに応じた指導体制を整えることは現実的に困難である。学生と教師がそれぞれ意欲をもって卒業研究に取り組めるよう、今後ともシステムを改善していくための議論を重ねていきたい。

付記

本稿は、平成19年度佐賀短期大学FD活動の一環として著したものである。手間のかかるデータの整理や入力作業には、本学科目等履習生の古瀬絵里香さんにご協力をいただいた。

6. 参考文献

Judith Bell, Doing your research project: a guide for first time researchers in Education and Social Science, Open University Press, 1993.

小林康夫他編『知の技法』東京大学出版会, 1994年。

寺崎昌男『大学教育の創造：歴史・システム・カリキュラム』東信堂, 1999年。

池田他「幼児保育学科理論系『卒業演習』の学習指導における諸問題；担当教員によるファカルティ・ディベロップメントの取り組み」『佐賀短期大学紀要』第38巻, 2008年。